
研究報告

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 8
P.18-26 (2020)

本学部の初年次教育にサポート役として関わった 上級生の学びと学生間の縦のつながりにおける課題

The Learning Outcome of Senior Students who were involved as Supporters in First-year Education and Challenges in vertical Connection between Students.

榎本佳子¹⁾
ENOMOTO Yoshiko
影山孝子¹⁾
KAGEYAMA Takako
金井健史²⁾
KANAI Takefumi

辻川比呂斗¹⁾
TSUJIKAWA Hiroto
林亮¹⁾
HAYASHI Ryo
中村剛³⁾
NAKAMURA Tsuyoshi

山本哲子¹⁾
YAMAMOTO Tetsuko
栗原明美¹⁾
KURIHARA Akemi
江川潤⁴⁾
EGAWA Jun

池野佑樹¹⁾
IKENO Yuuki
長沼淳¹⁾
NAGANUMA Atsushi
原拓也¹⁾
HARA Takuya

小川薫¹⁾
OGAWA Kaoru

要旨

本研究は、初年次教育研修にサポート役として関わった上級生の学びと学生間の縦のつながりにおける課題を明らかにすることを目的とし、11名の学生を対象にフォーカス・グループ・インタビューを実施した。その結果、上級生の学びとして、【ファシリテーターとしての関わり方を学ぶ】、【上級生として1年生に関わる】、【1年生の理解を深める】、【上級生・下級生の信頼関係が構築する】、【自己の成長を実感する】、【自己の学びが深化される】の6カテゴリーが抽出された。学生間の縦のつながりにおける課題として、【上級生・下級生の関係性の希薄さ】、【男子学生やクラブ活動を行っている学生の縦の関係性は強い】、【縦につながることの大切さ】、【上級生・下級生の関係性構築のための工夫】の4つのカテゴリーが抽出された。

本学部の初年次教育研修に関わった上級生は、チーム形成の過程を学び、他者理解を通して自己理解を深める機会を得た。また、本学部における上級生・下級生の縦のつながりは希薄な一方で、男子学生やクラブ・同好会活動等に参加している学生は縦のつながりが強いことが明らかとなった。

索引用語：看護学生、協同学習、学生間の縦のつながり

Key words : Nursing student, Collaborative learning, Vertical connection between students

1) 順天堂大学保健看護学部

2) アクセプト

3) 武蔵野大学教育学部

4) 神田外語大学

1) *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

2) *Accept*

3) *Musashino University Faculty of Education*

4) *Kanda University International Studies*

(Nov. 8, 2019 原稿受付) (Jan. 131, 2020 原稿受領)

1. 研究背景

現在の看護職員には、地域包括ケアシステムにおける医療の場の多様化や、少子高齢社会の進展による医療・介護提供体制の変化により、対象の多様性・複雑性に対応した看護を創造する能力が求められている¹⁾。そのため、看護基礎教育においては、専門性の高い実践能力や人間性を兼ね備えた資質、臨床判断能力等が

求められている。特に、文部科学省では260校を超える看護系大学での実行可能性を考慮し、学士過程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標を内包した、看護実践能力の習得に必要な学習目標を「モデル・コア・カリキュラム」として提示している²⁾。その一つに看護系人材として求められる基本的な資質と能力として、知識と実践だけでなく、根拠に基づいた課題対応能力やコミュニケーション能力などを挙げている。しかし、近年の若い世代は世帯構造の変化による核家族化やIT社会の中で、人間関係の希薄化や生活体験の不足が進んでいるといわれており³⁾、豊かな人間性を兼ね備えた資質の高い看護職者の育成が問われている⁴⁾。

本学部では、初年次教育の一つとしてチームビルディング体験を基に独自に作成した、主体性の育みと自己理解・他者理解を目的とする研修を行っている。研修を受けた新入生は、「他者受容」や「前向き思考」、「リーダーシップ」が有意に向上し⁵⁾、これらの効果は、各教科におけるアクティブラーニングの実施可能性や部活動、自治会活動など学事への積極的参加と、自らが主体的に作り上げていく姿勢を磨いていくことが期待される。しかし、2018年に実施した当大学の学生生活実態調査によると、本学部は自治会活動やクラブ活動への加入率が3、4年生で極端に減少し、1年生は3、4年生との関係性構築の機会がほとんどないことが明らかとなった。その背景には、3年生から臨地実習が始まるのが要因の一つとしてあり、実態調査結果の中で、上級生は学事に参加する「ゆとりがない」と回答しており、下級生と関わる時間も少なく、つながりの希薄さが伺える。そのため、学年間の縦のつながりに分断が生じており、上級生からの屋根瓦式での情報伝達が困難になっていることが本学部の課題として挙げられている。

看護系大学における上級生と下級生との関わりについては、上級生が演習等で下級生への学習サポートを

行うことによる効果に関する研究が多く示されている。そこでは、技術演習の学習サポートを通して、下級生だけでなく上級生も主体的に学ぶ姿勢が育ち、自ら気づき、自ら行動することに繋げられるような実践力の育成に役立つことが示唆されていた⁶⁾。今回、本学部で実施された初年次教育に初めて上級生をサポート役として導入し、その経験が上級生にとってどのような学びを生み、また、学生間の縦のつながりにどのような課題があるか検討することとした。

II. 研究目的

本研究は、本学部の初年次教育プログラムの一つである、新入生スタートアップセミナーにサポート役として関わった上級生を対象とし、参加したことによる学びと学生間の縦のつながりにおける課題を明らかにする。

III. 新入生スタートアップセミナーの概要と上級生の役割

新入生スタートアップセミナー（以後FCとする）とは、本学部独自に作成された初年次教育の一つである。プログラムの内容は、チームビルディングの体験学習を元に構成され、それはメンバー間の関係性に着目してチームの成長過程を5段階でモデル化している“タックマンモデル”で表すことが可能である⁷⁾。

5段階の時期とは、①形成期：お互いに知り合っていく時期②混乱期：メンバー間の違いが明らかになり不安になる時期③統一期：チームのルールや規範が確立する時期④機能期：チームが成果に向けて機能している時期⑤散会期：目的の達成によりチームは解散するの5つの時期に分けられている。本研修の目的は、大学生として新たな生活が始まる中で、自己理解・他者理解を深め、主体的に学習するための心構えを身につけることとし、入学後の4月中旬に2日間実施している。新入生は3教室（40名程度）に分かれ、ファ

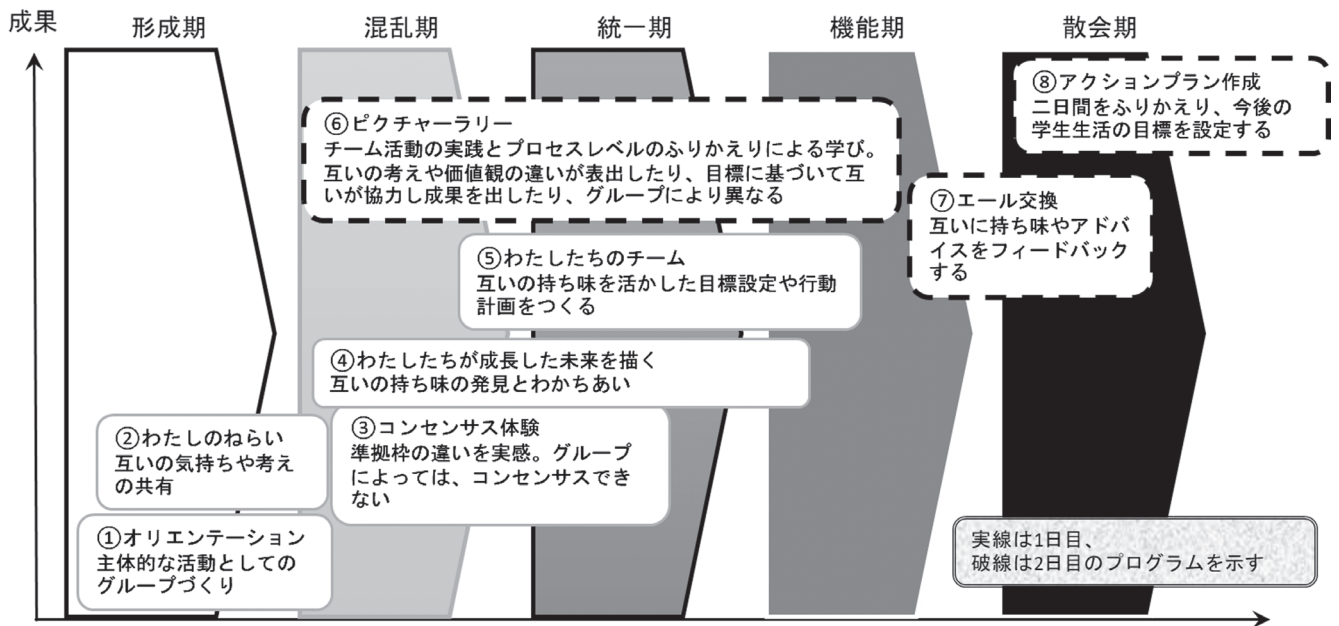


図1 タックマンモデルに対応するFSにおける各セッションの位置づけ

シリテーターのもと1グループ5～6名で研修を行う。プログラム内容は、学内での研修と三島市街を散策する活動実践から成り立ち、運営は、本学部の学生部委員と外部講師により行われる。今回、初めてすべてのグループに上級生を配置し、下級生の支援を2日間依頼した。

上級生の役割は、ただ単に資料配布や研修の準備といったセミナー運営に関する事務的運営補助としてではなく、新入生がFCの主体者として自ら学びを得ていく過程において、最も近くでそれを見守りながら手助けを行う役割、すなわち、ファシリテーター的な要素を含めた支援を行うことを依頼した。その際、上級生は新入生のグループに1名ずつ配置した。研修前日、学生部委員ならびに上級生は、外部講師よりファシリテーターの役割について1時間程度のレクチャーを受けた。

IV. 用語の操作的定義

本研究での「縦のつながり」とは、「上級生と下級生の間においてコミュニケーションが取れ、情報交換

が円滑に行われる関係であること。例えば、下級生が上級生に学習面や課外活動、私生活の悩みなどを気兼ねなく相談することが可能な関係であること。」

V. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 研究対象者

2019年度FCに参加した上級生27名のうち同意の得られた11名を対象とした。

3. データ収集方法

データ収集は、2019年7月に実施した。研究参加への同意を得られた11名から研究参加希望日を聴取し、5～6名を1グループとし2グループに分け、参加者間の相互作用的な議論により、メンバーの「行為」とその行為に意味を与える「背景状況」の両方を把握できる⁸⁾とされているフォーカス・グループ・インタビューを実施した。インタビュー内容は、(1)上級生としてサポートした内容と下級生の反応・様子(2)上級生としての学び(3)下級生とのつながり

の課題を中心にインタビュー項目を設定した。会話はICレコーダーに録音すること、分担者2名(記録者、観察者)が同席し記録を行うことについて参加者全員の了承を得た。インタビューの進行は、研究代表者が全て実施した。2回のグループインタビューは研究対象者が所属する大学内の個室で行い、インタビュー時間は学生の負担を考慮し、60分以内とした。インタビュー時間の平均は、58.5分であった。

4. データ分析方法

インタビュー内容は全て逐語録に起こした。テキストの内容について、何が語られているのかに留意しながら、詳細な意味と全体の意味をつかむために繰り返し熟読した。再度、テキストを読みながら、『サポートした上級生の学び』と『上級生・下級生の縦のつながりの課題』について表現しているデータを抽出し、コード化した。各コードの類似性と相違性に配慮しながら抽象度を上げてグルーピングを行い、サブカテゴリーとして抽出し、さらに抽象度をあげたカテゴリーとして抽出した。結果の分析は、インタビュー終了直後に、インタビュアー、記録者、観察者で集まり、主な結果や疑問点について確認を行った。また、内的妥当性を高めるために、学生部委員のメンバーで検討を行った。

VI. 倫理的配慮

研究対象者に対して、調査の目的、倫理的な配慮について研究対象者用依頼・説明文書を用いて口頭にて説明を行った。また、本研究の参加は任意であり、自由意志の参加であること、参加の可否が成績評価とは無関係であることを併せて説明を行った。調査への協力は同意書の提出によって同意を得た。その際、学生が自由意志で研究参加を決定できるよう、即時に同意書の回収は求めず、個別の封筒を渡し、後日、改めて同意書を所定のポストへ投函するよう配慮した。インタビューの日時については、正規のカリキュ

ラムの履修に影響の出ないように授業時間割を確認したうえで決定した。なお、本研究は、順天堂大学保健看護学部倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号:順保倫第1-03号)。

VII. 結果

対象学生11名の内訳は、4年生6名、3年生2名、2年生3名であった。男子学生は3名、女子学生は8名であった。サポート役として関わった上級生の学びは、128の意味単位から、20のサブカテゴリー、6のカテゴリーが抽出された(表1)。学生間におけるつながりの課題は、55の意味単位から、8のサブカテゴリー、4のカテゴリーが抽出された(表2)。以下、カテゴリーごとの内容を説明する。なお、本研究結果は、【 】をカテゴリー、《 》をサブカテゴリーとして示した。また逐語録から抜粋した上級生の代表的な語りを生データとして「 」内に示した。

1. サポート役として関わった上級生の学び

1) 【ファシリテーターとしての関わり方を学ぶ】

このカテゴリーは、《意思決定を支援する》、《見守る》、《ポジティブになれるよう関わる》、《関係性が構築できるよう関わる》、《傾聴する》、《1年生を第一に考えて介入する》、《安全面をサポートする》、《ファシリテーターとしての役割を意識する》の8つのサブカテゴリーで構成されていた。上級生が1年生と関わる際、「事前に助言しすぎないようにって言われてたので、見守る感じが本当に強く」や、「これはこの子たちのために言っているのかというのを一回、自分の中に落として考えてみた」と、ファシリテーターとしての自覚をもって1年生と関わり、「ファシリテーターとして、言わないことの大切さというのがやっぱり一番の学びだった」と、ファシリテーターとしての経験から良い方向性に導くための進行役としての関わりを学んでいた。その一方で、「言わずに見守るというスタンスでやったとき、自分の中では難しかった

表1 上級生の学び

【カテゴリー】	《サブカテゴリー》	〈コード例〉	
ファシリテーターとしての関わり方を学ぶ	意思決定を支援する	・話し合いが進むよう介入した ・潤滑剤として介入した ・グループダイナミクスを生かせるよう介入した	
	見守る	・口出しせず1年生のやりたい方向についていった ・自分から積極的に伝えないように注意した ・見守る感じが強かった	
	ポジティブになれるよう関わる	・1年生の取り組みを褒めるよう関わった ・よりポジティブになれるよう関わりをもった	
	関係性が構築できるよう関わる	・グループが最終的に深い関係性になれるよう介入した ・つなぐ役割をしていた ・和ませるような雰囲気づくりをした	
	傾聴する	・1年生が何を思っているのかしっかり聞くようにした	
	1年生を第一に考えて介入する	・1年生のためになるか考え言葉を選んだ ・1年生のために考え発言した	
	安全面をサポートする	・フィールドワークの安全確保に努めた	
	ファシリテーターとしての役割を認識する	・ファシリテーターとして言わないことの大切さを学ぶ ・言わない介入の難しさを学ぶ	
	上級生として1年生に関わる	相談役となる	・プライベートな相談を聞いた ・大学生活についての相談にのった
		親のような存在で見守る	・1年生ができるようになり親のような感覚で安心して見ていられた
1年生の理解を深める	1年生のポジティブな変化を読み取る	・最後はグループとして団結していた ・1年生がグループの中で自己の役割を意識して活動していた ・積極的に発言するようになっていった ・接拶してもらえるようになった	
上級生・下級生の信頼関係が構築する	1年生との信頼関係が構築する	・1年生との信頼関係が構築できた ・傾聴することで後輩が信頼してくれた	
	上級生の中での信頼関係が構築する	・先輩と仲良くなれた	
自己の成長を実感する	大学生活を振り返り自己の成長を実感する	・1年生のときに気が付けていなかった別なことに気が付けた ・グループワークの意味を改めて実感した ・どういう過程を経て今の考えに至ったか分かった	
	1年生の時を振り返る	・1年生の時は戸惑いが大きかった	
自己の学びが深化される	1年生の学びから自己の学びを深める	・一つ一つのプロセスが大切で無駄はないことを学んだ ・考えて行動することの大切さを学んだ ・一歩引いて冷静にもの後を見ることの大切さを学んだ	
	自己の課題を明確にする	・自分に不足している部分を認識できた	
	研修参加で得た学びを自己に生かす	・学年によって学びが変化するため継続した参加が必要である	
	上級生との関わりから学ぶ	・先輩の関わりは教員と似ていた ・先輩の話から勉強することができた	
	看護職を目指すものとして学びを深める	・話し合いを見守ることは看護師の役割と似ていると感じた ・看護師として相手の意見をまとめる役割について学んだ ・実習指導者が言わなかったことの必要性に気が付いた	

た」と、ファシリテーターとしての関わりの難しさについて実感していた。

2) 【上級生として1年生に関わる】

このカテゴリーは、《相談役となる》、《親のような存在で見守る》の2つのサブカテゴリーで構成されていた。上級生は1年生と関わる際、ファシリテーターとして中立的な立場として研修の支援を行っていたが、相談役や親のような気持ちで関わる機会があった事を示している。特に、三島市街を散策した活動実践の中で、「学校の話の相談とかがあり、相談役になっていた」と、上級生として大学生活やプライベート

な相談にのるといった関わりを行っていた。また、「1年生が最後は自分たちでできているのを見て、親のように安心した」と感じており、ファシリテーターとしての関わりだけでなく、上級生として1年生に関わりを持ち、成長をサポートしていた。

3) 【1年生の理解を深める】

このカテゴリーは、《1年生のポジティブな変化を読み取る》、の1つのサブカテゴリーで構成されていた。上級生は、2日間の関わりの中で「最初よりは6人で一個のグループ、団結力ができていたんじゃないかな」とポジティブな変化を読み取り、1年生

表2 現在の学生間のつながりと課題

【カテゴリー】	《サブカテゴリー》	〈コード例〉
上級生・下級生の関係性の希薄さ	上級生・下級生のつながりの希薄さ	・下級生とのつながりはほとんどない ・先輩後輩の濃いつながりはない
	アドバイザーグループ内でのつながりの希薄さ	・アドグルのつながりは強くない ・アドグルの食事会でしか関わらない
男子学生やクラブ活動を行っている学生の縦の関係性は強い	男子学生の縦のつながりは強い	・男子学生は学年に関係なくつながりがある ・男子は人数が少ないからつながりはある
	クラブ・同好会等の縦のつながりは強い	・一番は部活のつながりが強い ・部活に入ってから先輩とつながり強くなった ・学内ボランティアで先輩とつながれた
縦につながることの大切さ	縦につながることの大切さ	・看護師となったとき縦のつながりがあるとよい ・関連病院に先輩がいると安心する ・先輩がいないとやってこれなかった
	学生間につながりに対しての教員の介入	・教員の介入によりつながることができる
上級生・下級生の関係性構築のための工夫	後輩とつながるための工夫	・先輩自ら積極的に話しかける
	アドバイザーグループ内での工夫	・食事会だけにとらわれない ・アドバイザーグループ単位での勉強会の開催 ・アドバイザーグループ内での語れる場の設定

への理解を深めていった。

4) 【上級生・下級生の信頼関係が構築する】

このカテゴリーは、「1年生との信頼関係が構築する」、「上級生の中での信頼関係が構築する」の2つのサブカテゴリーで構成されていた。研修会を通して「本当にもう、スタートアップセミナーで先輩たちと関わったりして、先輩たちとのいい仲間も築けたし」と、1年生と上級生との間で信頼関係が構築されたことを実感していた。また、1年生との関係性だけでなく、「今回、関わったことすごいわ先輩とも近くなれたというか」と、上級生間においても信頼関係が構築されたことを実感していた。

5) 【自己の成長を実感する】

このカテゴリーは、「大学生活を振り返り自己の成長を実感する」、「1年生の時を振り返る」の2つのサブカテゴリーで構成されていた。1年生の研修会に上級生として参加することで「大学1年として入ってきた時は、どうやって勉強すればいいかとか。大学は自分から行動して、興味をもって行動しなければと1年経って気づいた」や、「結構1年生よりグループワークの意味を感じたんじゃないかな」と、1年生の研修の様子を通して大学生活における自己の成長を実感していた。

6) 【自己の学びが深化される】

このカテゴリーは、「1年生の学びから自己の学びを深める」、「自己の課題を明確にする」、「研修参加で得た学びを自己に生かす」、「上級生との関わりから学ぶ」、「看護職を目指すものとして学びを深める」の5つのサブカテゴリーで構成されていた。1年生が実施しているプログラム内容を一緒に経験することで、上級生自身も自己理解・他者理解を深め、「自分で考えて行動するみたいな、学ぶみたいなことに気づけた」や、「参加する学年で見方も変わってくるから、上級生にとってもいい機会になるな」など、現在の大学生活において主体的に学習することの必要性や、学年によって研修会に参加することで違った学びを得ることができることを感じていた。また、領域実習を経験した4年生からは、「カンファレンスとかの話し合いのスキルを見直す機会になった」や、「一歩引いて見守る役を実施して、患者と家族、患者と医師の話しを看護師としてつなぐ時と似ているなと終わった後に気づいて」と、看護師として必要なスキルについて考えていた。

2. 学生の縦のつながりと課題 (表2)

1) 【上級生・下級生の関係性の希薄さ】

このカテゴリーは、「上級生・下級生のつながりの

希薄さ》、《アドバイザーグループ内での縦のつながりの希薄さ》の2つのサブカテゴリーで構成されていた。本学部の上級生・下級生のつながりは、「すごい、濃いつながりがあるかといわれたら、それは今の大学にはない」や「授業もバラバラで放課後にそうやって会うこともあんまりないかな」と、縦のつながりの希薄さについて語られていた。また、縦の関係性についてアドバイザーグループについての語りが聞かれた。本学部はアドバイザー制を導入しており、2名の教員で少人数の学生を担当し生活面の指導・支援を行っている。アドバイザーグループは、1年次から4年次まで学年を超えた交流が持てるよう編成し（1学年8名程度、1グループ30名程度）、懇親会を年に2回ほど開催している。今回、アドバイザーグループについて、「普段はなかなか機能していないので、うまく活用できていない」や「食事会の時しか、唯一ないから」と交流の機会は与えられていてうまく活用できていないことが課題とされていた。

2) 【男子学生やクラブ活動を行っている学生の関係性は強い】

このカテゴリーは、《男子学生の縦のつながりは強い》、《クラブ・同好会等の縦のつながりは強い》の2つのサブカテゴリーで構成されていた。「男子が少ないから、つながりというのはすごい感じていて」や、「やっぱり部活でのつながりは結構大事で」と、男子学生やクラブ・同好会等に参加している学生は縦のつながりが形成されていると感じていた。

3) 【縦につながることの大切さ】

このカテゴリーは、《縦につながることの大切さ》の1つのサブカテゴリーで構成されていた。学生は縦のつながりについて「実習病院に行ったとき、仲の良かった先輩が声をかけてくれると安心する」や、「顔見知りだと就職したときとかにも聞きやすい」など、上級生とつながることの大切さを感じていた。

4) 【上級生・下級生の関係性構築のための工夫】

このカテゴリーは、《学生間のつながりに対する教員の介入》、《後輩とつながるための工夫》、《アドバイザーグループ内での工夫》の3つのサブカテゴリーで構成されていた。上級生・下級生の縦の関係性構築にむけて「先輩自ら後輩に声をかけ、つながりを持てるように介入していくことじゃないですかね」と、先輩から後輩に歩みよっていくことの必要性について語られていた。また、アドバイザーグループについては、「食事にとらわれないほうがいい」、「語れる場を設定したり勉強会を設定したりすると、よい機会になるかな」など、アドバイザーグループの新たな交流の場の設定について提案があった。

VIII. 考 察

1. 本研究で得られた上級生の学び

今回、本学部の初年次教育の一つであるFCにサポート役として参加した上級生は、今回のセミナーの役割として求められていた【ファシリテーターとしての関わりかたを学ぶ】だけでなく、上級生として1年生が抱える大学生活等への不安に対して相談役になり【上級生として1年生に関わる】ことを行っていた。また、研修を通して成長する1年生の姿を実感し、【1年生の理解を深める】ことを体験していた。そこから1年生との信頼関係だけでなく、関わった上級生同士においても【上級生・下級生の信頼関係が構築する】といった、同じ目標に向かって進んでいくチームのような存在が形成されていた。このような上級生の変化を、先に述べた“タックマンモデル”によって考察してみる。今回の研修は新入生を対象としたものであるが、サポート役として関わった上級生にも1年生を理解するといった『形成期』、ファシリテーターとしての関わり方の難しさを学ぶ『混乱期』を得て、新入生がチームとして成長している有様を間近に捉えながら共にチームの一員として貢献しようとする『統一期』、それぞれの関係性を構築

していく『機能期』、そして全体の振り返りの中で新入生らの成長を見届け自身の学びを深めた『散会期』といった過程を体験した。厚生労働省は、チーム医療について我が国の医療の在り方を変え得るキーワードとして注目を集めていると指摘しており⁹⁾、この過程は、医療チームの一員として多職種と協働する看護職者にとって必要なスキルであるといえる。上級生はFCでサポート役を行った経験から、チームの成長過程を自らの体験を通して学ぶことができたことと示唆される。

また、上級生は1年生の初年次教育に関わることで、大学生活における【自己の成長を実感する】ことができ、さらには【自己の学びが深化される】ことにまで発展させていた。学年により学びの深化は様々であったが、特に領域実習が終了した4年生は、将来看護職として働く自己の学びにまで発展させていた。このように上級生は、1年生との関わりから“他者理解”をし、それを“自己理解”へとつなげていったと考えられる。看護職は、心のケアを行おうとするならば、自己理解と他者理解が必要であるといわれている¹⁰⁾。今回、1年生との関わりから、改めて自己の内面と向き合うことができたことは、自己の成長を客観的に実感し、看護職者としてどう在りたいかを考える機会になったと示唆される。

2. 本学部における上級生・下級生のつながりと課題
本学部における学生間の縦のつながりについて学生は、【上級生・下級生の関係性の希薄さ】を感じている一方で、男子学生やクラブ・同好会等に所属するものは、上級生との関わりがあるため、【男子学生やクラブ活動を行っている学生の縦の関係性は強い】と感じていた。男子学生との関係性が強い要因には、「自ら下級生へ積極的な声掛けを行うようにしている」という4年生男子の語りから分かるように、上級生がリーダーシップを発揮し関係性構築にむけて介入していることが挙げられる。クラブ活動については、昨

年度、本学部でクラブ・同好会活動を行っていた学生は全体の5割であり、そのうち3・4年生になると2割がクラブ・同好会活動を継続しており、その割合は極端に下がっている。ベネッセ教育総合研究所の調査¹¹⁾によると、一般の大学生のサークルや部活動への参加状況は「参加している」が49.0%であり当大学の結果と同様であったが、サークルや部活動への参加日数では学年による違いはみられておらず、看護系大学では、高学年になると領域実習が始まるため、クラブ・同好会活動に時間を割くことは難しい状況にあることが伺える。

大学内における人間関係のつながりは、一見、大学教育の本質とは距離があるように見えながら、実は大学に対する満足度のみならず、学習意欲や成長実感といった大学教育の本質にも大きく影響することが明らかとなっている¹²⁾。また、現代は、ICTの革新に伴い若者の友人関係の形成に多様性はみられるが、大学生にとって、意識面・物理面ともに友人関係のもたらす影響は大きいとされている¹³⁾。実習を含めた学習とクラブ・同好会活動が4年間継続できるような、時間的・環境的整備の必要性が示唆された。そのような上級生・下級生のつながりの中で学生は、【縦につながることの大切さ】を感じ、縦のつながりの希薄さを解決するための【上級生・下級生の関係性構築のための工夫】について語られていた。特にアドバイザー制度の活用についての語りが聞かれ、アドバイザーグループの在り方を今一度考え、縦のつながりの関係性構築を目指した活用方法の再検討が必要である。

IX. 本研究の限界

本研究の限界は、サポート役として関わった上級生が有志による参加者であり、研究対象者はそのうちの協力者による調査である。また、4年生が半数を占めていることや男子学生が少なかったことにより、

結果が偏重された側面がある。今後研究を継続していくうえで、上級生のサポートが新入生にとってどのような効果があったかも含め研究を進めていくことが課題である。

X. 結 論

FCにサポート役として関わった上級生の学びとして、【ファシリテーターとしての関わり方を学ぶ】、【上級生として1年生に関わる】、【1年生の理解を深める】、【上級生・下級生の信頼関係が構築する】、【自己の成長を実感する】、【自己の学びが深化される】が示された。また、学生間の縦のつながりにおける課題は、【上級生・下級生の関係性の希薄さ】、【男子学生やクラブ活動を行っている学生の関係性は強い】、【縦につながることの大切さ】、【上級生・下級生の関係性構築のための工夫】が示された。

謝 辞

本研究を行うにあたり快く研究に参加して下さった学生の皆様に、心より感謝申し上げます。なお、本研究は令和元年度保健看護学部共同研究の助成を受け実施したものである。

引用文献

- 1) 厚生労働省 (2019.10.15) : 看護基礎教育検討会報告書
<https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07297.html>
- 2) 日本看護系大学協議会 (2019.12.24) 看護系大学の現状と課題
<<http://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2018/06/monbukagakusyou20180618.pdf>>
- 3) 1) 再掲
- 4) 辻野朋美, 上野範子, 緒方巧他: 看護学生の看護職者としての資質に関する研究, 藍野学院紀要, 19, 79 - 88, 2005.
- 5) 辻川比呂斗, 中村剛, 江川潤他: 新入生スタートアップセミナー「仁(JIN)への道」の作成プロセスとその効果, 順天堂保健看護研究, 6, 45 - 52, 2018.
- 6) 吉田和美, 川西美佐, 岡田淳子他: 看護技術力向上を目指した学習サポート制度における上級生の学びと本制度の課題, 日本赤十字広島看護大学, 14, 75 - 83, 2014.
- 7) Tuckman, B. W. : Developmental Sequence in Small Groups, Psychological Bulletin, Vol.63, No.6, 384 - 399, 1965.
- 8) 安梅勅江: ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法 科学的根拠に基づく質的研究法の展開 第1版, 医歯薬出版株式会社, 東京, 1, 2017.
- 9) 厚生労働省: チーム医療の推進について チーム医療の推進に関する検討会報告書, 2010年3月19日発表
- 10) 山本勝則, 吉田一子, 内海滉: 看護場面における他者理解と自己理解との関連, 保健科学研究誌, 1, 27 - 33, 2004.
- 11) ベネッセ教育総合研究所 (2019.12.24) 大学生の学習・生活実態調査報告書
<https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/daigaku_jittai_2_2_3.html>
- 12) 谷田川ルミ: 大学における“つながり”の重要性 - 第3回大学生の学習・生活実態調査報告書 -, ベネッセ教育総合研究所, 41 - 48, 2018.
- 13) 山田剛史: 大学生のリアルな友人関係を捉えるために - 丹野論文へのコメント -, 青年心理学研究, 21, 115-120.